

(六) 重い幻聴行進

低い眩きが

耳の底から信号のように這いこむ

曇った声は次第に言葉と変わって

脳みそを這いずり回る

歌に変わって君が代や盆踊りになる

大きな声で褒め煽て

かと思えば罵り罵倒する

音調が急上昇して爆発音や銃器の音に変わる

その合間に

軍隊の行進の靴の音が響き

鋭い命令が斜めに走る

原爆だつという叫び声の後は

痛々しい子供の鳴き声

それを取り巻く女たちの励まし声が

記憶の壁を這いずり回る

地獄だ——という叫びが

すべての音を吹き消してしまふ

今俺たちは何をしているのだ

何をしたいと思っっているのだ

過去の音をすべて消したいのだが、

体がままならない

消されたテープのように

そしてその上に彫り物のように

リプリントされる

恐ろしい歴史の外科手術に耐えている

無数の蛆の中を声も出せずに這いずり回り

血だらけの沈黙の中を

声なき民の行進が続くのを見る

沈黙の群衆の耳には

もう生き直すのは嫌だ、という

ハレーションが闇をつんざいている

魔法の笛のように ——

(二〇一九年一月二〇日)